

呉昌碩と水野疎梅

松村茂樹

清末民初の上海で、文人職業書画家として活躍した呉昌碩（一八四四—一九二七）は、その高名を慕って訪れる日本人士と少なからず交際している。書家の水野疎梅（一八六四—一九二一）もその一人である。

本稿では、二人がやりとりした詩を資料に、交誼の実態を明らかにすると共に、その胸中を分析したい。このことにより、近代日中文化交流の深部を明らかにすることができるだろう。

一、初めての出会い

水野疎梅は、幼名を廉吉、名を元直、字を簡卿また廉卿といい、疎梅と号した。福岡の人。書家。国権主義、アジア主義を唱える玄洋社の一員として朝鮮に渡り、一旦帰国後、前後五回にわたって渡清し、上海を拠点に各地を遊歴した。また、上海では、楊守敬、呉昌碩、王一亭、李瑞清らと交わり、とりわけ、楊守敬に入門し、『学書邇言』を書き与えられたことはよく知られている。

その事跡は多く埋没していたが、横田恭三氏の「楊守敬と水野疎梅」〔『書論』第二六号・一九九〇、九、一八・書論編集室 所収〕、「水野疎梅とその交遊」〔『書学書道史研究』第二号・一九九二、六、三〇・書学書道史学会 所収〕、「水野疎梅と福岡の碑誌」〔『跡見学園女子大学文学部紀要』第三六号・二〇〇三、三、一五・跡見学園女子大学 所収〕により、照明が当てられた。

呉昌碩と疎梅の初めての出会いについて、呉長艸「呉昌碩先生年譜」（呉長艸著、河内利治・北川博邦訳『わが祖父呉昌碩』・一九九〇、三、

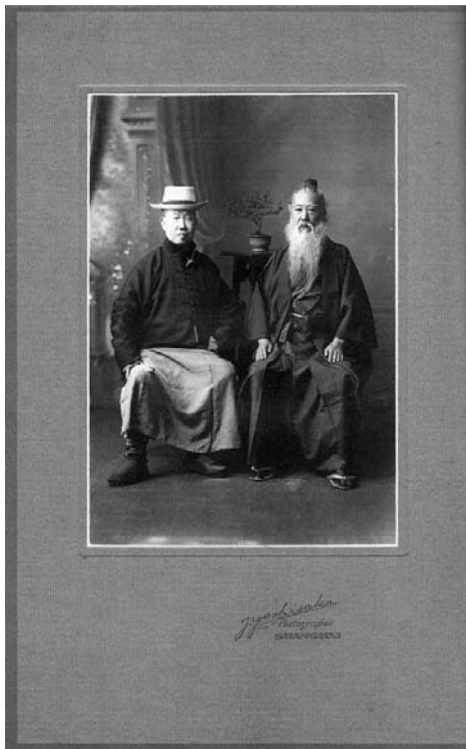


図1 呉昌碩（左）と水野疎梅（西冷印社蔵）『呉昌碩逝世八十周年書画篆刻特集・与古為徒・別冊』・二〇〇七、九・澳門芸術博物館 所収

二〇・東方書店所収)は、「一九一〇(宣統二年庚戌)六十七歳」の項に、

日本人水野疎梅が上海に來り、王一亭の紹介で先生を訪問し中国画を學んだ。疎梅は葫蘆を贈ったので、先生は「疎梅贈葫蘆」詩を作って報酬い、あわせて注に疎梅が「長髯は腹を過ぎ、苦心して詩を為る」ことをいう。

と記し、一九一〇年のこととしているが、これは誤りであろう。

大正三(一九一四)年十一月五日発行の『書苑』四卷第七号(法書会)「記事」に、「水野疎梅支那に往かむ」という見出しで、

筑前の水野疎梅書を售りて今大阪に在り。近く上海に航して画を吳蒼石に學ばむ志あり。善哉。善哉。

とある(蒼石は吳昌碩の別字)。この時点では、まだ吳昌碩を訪ねていないことがわかる。

疎梅が吳昌碩を訪ねたのは、この翌々年の一九一六年であったらしい。これは、疎梅の詩集『疎梅詩存』(一九二二、一〇、一序・私刊本/福岡県立図書館蔵)にはじめて見える吳昌碩にまつわる詩「奉呈老缶吳蒼石先生」二首によってわかる。

七十三年書画禪、南宗衣鉢証心伝。

披胸丘壑橫虚榻、落筆雲煙捲素箋。

海外夙欽常夢寢、滬中相遇亦因緣。

先生真是丹青仙、濟我慈悲彼岸船。

葵心夙昔慕高風、逸韻¹橫生翰墨中。

豈与倪黃同歩武、別開面目有神通。

今日清交比冰雪、一時恩眷勝衡嵩。

千里遠來非偶爾、画堂叨拜表深衷。

〔七十三年の書画は悟りの境地に入り、南宗画奥義の伝授を得ている。〕

胸中の深遠な意境を開いて空の寝台に横たわり、筆を下せば躍動し白い紙をまくる。

海外でも夙に尊ばれ私も常に憧れており、上海でお会いできたのもまた因縁。

先生はまことに絵画の仙、私を慈悲でもって彼岸に渡してくれる船。

古を尊び立派な人物を慕い、すぐれた趣が翰墨の中にあふれている。

どうして倪瓚や黄公望と共に歩もうか、別に風格を開き靈妙さがある。

今日の清雅な交わりは冰雪に比すことができ、ひとときの恩顧は衡山や嵩山に勝る。

千里の遠くから来たのはたまたまではないと、お宅を訪ねさせていただきわが真心を表したい。〕

山人何事出青山、千里浮楂層浪間。

欲謁先生叨問道、鞠躬來拜古玄關。

〔山中に隠棲する私がかうしたことか樹木茂る山を出て、千里の彼方へ浪のまにまにいかだを浮かべた。〕

先生に拝謁して道を問わせていただくべく、身をかがめてうやうやしく古なる玄関を拜したい。〕

つまり、この詩の内容から、疎梅は吳昌碩「七十三年」歳の年、つまり一九一六年に、はじめて上海で吳昌碩に会っていることが窺える。ただ、まだこの時点では吳昌碩の自宅を訪問してはいないようだ。そして、おそらくは日を改めて自宅を訪れ、その際に持参したのが葫蘆

(瓢箪)であったらしい。この時のことを疎梅は、「古瓢持贈缶廬」詩(前出『疎梅詩存』所収、以下、疎梅の詩はすべて同様のため注記省略)で、

一瓢遠自日東天、持贈缶廬吟榻前。

山水清游知為侶、月華芳醞好同緣。

応勸海上詩仙醉、更受吳中高士憐。

羨爾生來多幸福、而今無恙伴名賢。

「一つの瓢箪を遠く日本の空よりもたらし、手づから缶盧の詩歌を作る寝台の前に贈る。
山水に風雅に遊べば友となろうし、月下の宴会では縁をともしにくれよう。

海上（上海）の詩仙に酔いを勧め、さらには呉中（蘇州）の高士にいとおしまれるはずだ。

お前がうらやましい生まれつき幸福が多くて、今も恙無く名賢の伴となれたのだから。」
と詠じている。

これを受け、呉昌碩は「疎梅贈胡盧」詩（『缶盧詩』卷七、『缶盧集』卷三所収）を作ることになる。その冒頭で、

不縣市肆縣秋空、胡盧胡盧來自東。

腰織脛縮彎若弓、安得漢書穩置胡盧中。

癖古博物疎梅翁、游屐著破詩則通。

持贈一笑胡盧同、艾藏古綠丹駐紅。

〔商店に懸けられず秋空に懸けられ、胡盧よ胡盧よ東からやって来た。

腰はほっそり脛は縮んで弓のように彎曲し、どうして後漢書費長房伝にいうように胡盧の中で落ち着けようか。

古を癖好し物知りな疎梅翁、出歩いて着物は破れているが詩は通達している。

手づから贈ってくれ一笑すること胡盧と同じ（胡盧に笑の意あり）、古縁を蔵するような老年の風采に紅顔を留めるかのような若い心が

図2 呉昌碩与水野疎梅「胡盧図」（部分／松丸東魚編『呉昌碩書画集』（一九五八初版／一九七一、七、一第三版発行・西東書房所収）



呉昌碩と水野疎梅

ある。」
と述べており、疎梅を高く評価している。

これは作詩年代順に収録されている『缶盧詩』にはじめて見える疎梅に関する詩で、この六首前の「瑤笙示呉梅邨画」詩が一九一六年の作と前出「呉昌碩先生年譜」は記している（手稿によるとしている）。そして、この四首後に「疎梅游倦東歸索詩」詩があり、これに、

時丙辰十月二日。

〔時に丙辰（一九一六）十月二日のこと。〕

という注が付されている。さすれば、「疎梅贈胡盧」詩は、『缶盧詩』における配列から、一九一六年の作であることになる。さらには、松丸東魚編『呉昌碩書画集』（一九五八初版／一九七一、七、一第三版発行・西東書房）に、呉昌碩が疎梅から贈られた胡盧を画き、この「疎梅贈胡盧」詩（詩に一部語句の異同あり）を題した作が収められており、落款に、

疎梅贈古胡盧、画竟復涂小詩。就正。丙辰新秋、呉昌碩老缶。

〔疎梅が古い胡盧を贈ってくれ、画き終わって更に小詩を書き付けた。斧正を請う。丙辰（一九一六）新秋（七月）、呉昌碩老缶。〕

とある。これより少なくとも、呉昌碩が疎梅から贈られた胡盧を画いたのは、一九一六年の旧暦七月であったことが窺える。

以上を総合すると、疎梅は一九一六年の旧暦七月までに呉昌碩と上海ではじめて会い、次いで自宅を訪ね、胡盧を贈り、同年の旧暦十月二日には帰国にあたって呉昌碩に詩を求めていることになる。よって、呉昌碩と疎梅の出会いを一九一〇年のこととする前出「呉昌碩先生年譜」の記述は訂正されねばならないだろう。

二、深まる交誼

呉昌碩の知遇を得た疎梅は、この年の旧暦八月、自らの詩集、つまり『疎梅詩存』の封面を書いてもらっている。呉昌碩は、「疎梅詩存」

と篆書で書き、そして行書で、

丙辰秋仲、安吉呉昌碩篆。

〔丙辰（一九一六）秋仲（八月）、安吉の呉昌碩が篆書で書いた。〕と記している。

帰国にあたり、疎梅は、「留別呉蒼石先生」詩を作り、蘇州に行った（『疎梅詩存』に「游蘇」詩が見える）後、さらに「重留別缶廬」詩を作って、

零丁遠夢草堂秋、又恋缶廬多別愁。

一片飛帆滄海上、古呉天未幾回頭。

〔志を失った私は遠く草堂の秋を夢見たものだが、それにわをかけた缶廬を恋しく思い別れの愁いに満ちている。〕

一隻の船が大海の上を飛ぶように行くが、古の呉の空をいまだいくばくもなく振り返っている。〕

と述べている。末句の「呉」が呉の地と呉昌碩を掛けていることは言うまでもない。

翌年の一九一七年、呉昌碩夫人の施氏が病没し、疎梅は「呉俊卿亡室施氏輓詩」詩を作っている（俊卿は呉昌碩の名）。

その翌年の一九一八年、疎梅は上海に渡り、「王一亭招飲一品香、老缶在室」詩を作っている。³⁾つまり、呉昌碩の友人であり弟子でもあった実業家の王一亭に、上海福州路にあった西洋レストラン・一品香に招かれ、そこで老缶すなわち呉昌碩に再会したのである。この詩の四首後に「胡盧持贈缶翁一亭兩先生」詩があり、おそらくは改めて呉昌碩と王一亭を訪ね、また胡盧を贈っていることがわかる。この中に、
呉翁王郎拍手笑、形容奇古真天工。

〔呉（昌碩）翁も王（一亭）郎も拍手して笑い、形状は奇古で真に天のなせるわざという。〕

とあり、呉昌碩の気に入りようが窺える。
この年、呉昌碩は、疎梅が帰国にあたり贈った詩（これに該当する詩は『疎梅詩存』に見えず）に和した「疎梅將東帰、詩來言別、和之」

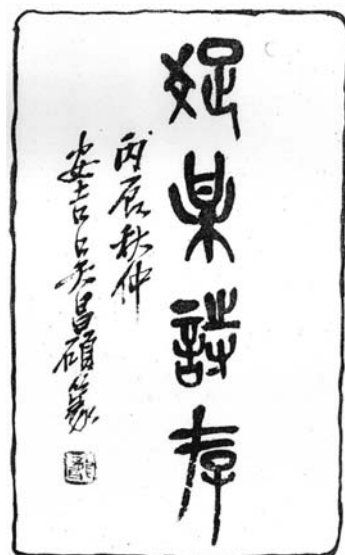


図3 呉昌碩筆『疎梅詩存』封面
(福岡県立図書館蔵)

詩（『缶廬詩』卷八所収）を作っており、この中で、

海鑿深杯沈醉否、梅開孤嶼再來無。

〔海のように満杯の酒を飲んで酔いつぶれているのか、梅が離島に開けばまた来てくれるのか。〕

と、疎梅への想いを吐露している。

そして、この二年後となる一九二〇年の秋、疎梅は三たび呉昌碩を上海を訪ね、「訪呉昌碩先生賦呈」詩三首を作っている。⁵⁾

蕭齋長物一氈青、止酒詩成靖節醒。

七十七年秋更好、黃花開遍白雲停。

〔書齋の贅沢品は一枚の青い毛氈、禁酒して詩を成せば靖節（陶淵明）も酔いが醒める。〕

七十七歳の秋は更に好く、黄色い花が遍く開き白い雲は停まっている。〕

折來海上傲霜枝、非仏非仙滿意詩。

不信加餐果英落、古精神見古東籬。

〔折しも海上（上海）にやって来た霜の寒さに屈しない菊のような私、仏徒でもなく仙人でもなく詩人に満足している。〕

養生を信じず果たして落ちぶれているが、古の精神を陶淵明が菊

を採った古の東籬に見ている。」
間將盃酒競詩才、隔斷煙濤夢
幾回。

未有青山投老意、白頭今復為
誰來。

〔時折杯酒を手に詩才を競いた
くなるが、もやのこめた水面が
間を隔てており夢から幾度覚め
たことだろう。〕

いまだ隠棲する気のない、白
髪の人今は今また誰のために来
たのか。〕

疎梅は、まず第一首で清貧なる呉
昌碩を称え、第二首で上海にやっ
て来た清貧にして落ちぶれている
自身を描き、そして第三首では他
でもない呉昌碩に会いに来たのだ
という。

三、上のなき知己

『疎梅詩存』にはこの後、「老缶一亭両先生同訂招飲道謝」詩二首が
見え、呉昌碩と王一亭が疎梅を招飲しており、さらに、「老缶先生招
飲席上賦贈」詩二首が見えることから、呉昌碩単独でも疎梅を招飲し
ていることがわかる。また、その後に、これらの答礼宴会の席上で賦
されたと思われる「陰曆十一月初七、招請呉昌碩・王一亭両先生及何
詩孫・趙叔孺・周湘舫其他諸賢、飲武昌路小黃鶴樓卒賦正之」詩が見
え、ここまが一九二〇年の作である。この一九二〇年秋、疎梅は呉
昌碩と極めて密に交際している。

呉昌碩と水野疎梅



図4 左から呉昌碩の次男・呉蔵龕、呉昌碩、水野疎梅、王一亭
(西冷印社蔵/『呉昌碩逝世八十周年書画篆刻特集・与古為徒・
別冊』二〇〇七、九・澳門芸術博物館 所収)

上記呉昌碩単独招飲の席上で賦された「老缶先生招飲席上賦贈」詩
二首には、疎梅の呉昌碩への想いが率直に表明されている。

海上有知己、狂游唱竹枝。

蟹肥宜下酒、蓴老碧干糸。

秃筆談如舌、深杯興解頤。

泉明猶小醉、止酒不相宜。

〔海上（上海）に知己がおり、狂おしく遊んで竹枝（民謡調の歌詞）
を唱う。〕

蟹は肥え酒の肴によろしく、蓴菜は料理されて豆腐干絲を碧に染
めている。

秃筆で話すかのように筆談し、杯を満たして大いに笑う。

泉明（陶淵明）はまだ少し酔っただけ、酒をやめるなどよくある
まい。〕

攢眉愁底事、一劍倚風塵。

李賀囊裏杖、泉明酒漉巾。

缶鳴瀛海表、梅就古篁隣。

弥勒同龕意、世間知幾人。

〔眉をよせ何事に愁うのか、一劍を兵乱のために佩びるなどと。
なのに私は李賀が詩を入れる袋を杖に掛け、泉明が酒を頭巾で漉
したように詩酒にひたっている。〕

缶（呉昌碩）は海外にまで鳴り響き、梅（疎梅）は古なる篁の隣
に付き従う。

弥勒のようなあなたと一緒にいたいとの想い、世間のどれだけの
人がわかってくれるやら。〕

第一首では、「知己」である呉昌碩との楽しい宴会のさまが描かれて
いるが、第二首では、一転して時局を愁う呉昌碩に対し、詩酒の世界
にひたるしかない境涯を述べ、呉昌碩を釈尊の救いに洩れた衆生を濟
度する弥勒とし、自らの救済を求めて、付き従っていたいとの想いを
投げかけている。

呉昌碩はこの疎梅の想いを受けとめたのであろう。この第二首の韻に和し、「水野疎梅索詩賦贈」詩（『缶廬集』卷四所収）を作り、疎梅に与えている。その冒頭には、疎梅への思いやりがあふれている。

古水野氏窮厓浜、字以疎梅芳四隣。

狂尋碧落披白雲、康樂木屐泉明巾。

杖偃夸父趨斜曛、仙侶徐略澆古墳。

來登泰岱窮崑崙、冥索禹穴窺颯颯。

吾圍兩戒方荊榛、吾足蹙濤心酸辛。

吾愁欲叫天無聞、君知吾如吾知君。

「古なる水野氏は行かざるところなく、字を疎梅といい四方の隣国に名声が伝わっている。

狂おしく青天を尋ね白雲を披くかのようにやって来るのに、康樂

（謝靈運）の木靴での山登りや泉明（陶淵明）の頭巾での酒漉しの

ように頓着することがない。

太陽と競争した夸父を杖とも頼って夕陽を追い、不老不死の薬を

求めた徐福を仙なる伴として古墳を祭奠する。

泰山に來り登り崑崙山を窮め、禹穴を探索して浙江南部から福建

を窺う。

わが辺境はまさに危急のとき、わが足はままならず心はせつない。

私は愁いて叫ぼうとしても天に宮門はない；、君が私をわかつて

くれること私が君をわかつているのと同じである。』

呉昌碩は、大陸を遊歴する疎梅を「四方の隣国に名声が伝わっている」

として大いに評価してやり、危急の時に何もできない遺民としての愁

いを吐露して、「君が私をわかつてくれること私が君をわかつている

のと同じ」とするのである。疎梅の想いを、呉昌碩はやさしく受けと

め、知己としたのであろう。

そして、翌一九二二年、疎梅は帰国にあたり、「留別老缶先生」詩

を作って、呉昌碩に贈った。

飄蕭我是一萍根、來去任他風浪捫。

茶館流連三四月、詞場出入幾晨昏。

酒才略拜青蓮後、涕淚空彈老杜魂。

話別江南愁不尽、何時重叩缶翁門。

「落ちぶれた私は根のない浮き草、行くも来るもなるままに風浪にさらされている。

茶屋で遊びふけること三・四か月、詩壇に出入すること幾日にな

ろうか。

酒呑みの才はあらかた青蓮（李白）の後塵を拝しており、涙を空

しく拭うときは老杜（杜甫）の心境である。

江南に名残の語らいをすれば愁いが尽きない、いつ再び缶翁（呉昌碩）の門を叩けることかと。」

詩においては自負するところがあるものの、「落ちぶれた」「根のない

浮き草」たる自身を救済してくれる呉昌碩と別れねばならない「愁い」

を吐露している。

『疎梅詩存』には、この帰国の際に作った留別の詩はこれしか見え

ない。つまり、疎梅は、呉昌碩のみに自らのやるせない思いを吐露し

た詩を贈って帰国したのである。そしてこの詩が海外で作った最後の

詩となった（同年十月六日、疎梅は福岡で病没）。

疎梅は、旅の終わり、そして人生の終わりををも予感しつつ、知己た

る呉昌碩のみに胸襟を開いた。このことは、疎梅にとって呉昌碩がか

けがえない存在であったことを物語っている。

疎梅の歿後、『書勢』第五卷第十一号（一九二二、十一、一・大同

書念）「雜報」欄に「水野疎梅歿す」の記事が掲げられている。

疎梅名は元直、福岡の人。屢支那に遊び書を楊守敬に聞き、楊歿

後呉俊卿に問ふ。詩を能くし、近年画を学びて蒼石を慕へり。去月

六日病んで歿す。

ここには呉昌碩（俊卿は名、蒼石は別字）に書画の教えを請うたことしか記されていないが、疎梅にとって呉昌碩はそれだけの存在ではなかつたのである。

おわりに

以上、呉昌碩と水野疎梅がやりとりした詩を分析しつつ、二人の胸中を考察した。疎梅は、当初、呉昌碩の画名を慕って交誼を求めたが、交誼が深まると共に、自らの愁いを救済してくれる知己とするようになり、呉昌碩もそれに応えて疎梅を知己とした。かくして、疎梅は、人生最後にして最高の知己を得ることができたのである。

水野疎梅は、楊守敬との関係で語られることが多いが、その人生においては、呉昌碩の方がより重要な役割を果たしていたのではないだろうか。

注

- (1) 「音」偏に「頁」に作るが、「韻」の誤字であろう。
- (2) 水野疎梅と呉昌碩のはじめの出会いを一九一〇年のこととする呉長郷「呉昌碩先生年譜」の誤りを、朱関田「君知吾知君——記呉昌碩与日本友人的交游」(劉海粟 王介籛等編著『回憶呉昌碩』・一九八六、十二・上海人民美術出版社 所収)、近藤高史「呉昌碩と日本人」(『書道研究』第五卷第一号「特集呉昌碩の人と書」・一九九一、一、一・萱原書房 所収) などそのまま受け継いでいる。
- (3) 『疎梅詩存』において「王一亭招飲一品香、老缶在室」詩の直前に「戊午浴仏日、偶於春鷗樓邂逅痴庵、今茲予將遊上海、痴庵為贈餞、賦似」詩があり、この時の上海行きが戊午(一九一八)年の浴仏日(灌仏会、四月八日)以降であったことがわかる。
- (4) 『缶廬詩』において「疎梅將東帰、詩來言別、和之」詩の四首前に「戊午六月八日、夢坡屬題戢山先生遺像」詩があり、二首後に「宋子鶴与予同生甲辰、虞琴姚君拉作百五十寿、時戊午秋」詩がある。よって、「疎梅將東帰、詩來言別、和之」詩は戊午(一九一八)年の旧暦六月八日以降、秋以前に作られていることがわかる。
- (5) 『疎梅詩存』において「訪呉昌碩先生賦呈」詩の直前に「庚申秋日、

呉昌碩と水野疎梅

又將游上海、賦此留別」詩があり、この時の上海行きが庚申(一九二〇)年の秋であったことがわかる。この年は呉昌碩七十七歳で、「訪呉昌碩先生賦呈」詩の「七十七年秋更好」という一節に符合する。

- (6) 「陰曆十一月初七、招請呉昌碩・王一亭兩先生及何詩孫・趙叔孺・周湘舫其他諸賢、飲武昌路小黃鶴樓卒賦正之」詩の直後が、辛酉(一九二一)年元旦作の「辛酉元旦」詩であることからわかる。

付記 『疎梅詩存』の全頁複印をいただいた福岡県立図書館にお礼申し上げます。